エグザマクス・クライシス

アインスト

時は西暦２１６２年。
地球軌道上にゲートと呼ばれる空間転移門が突如出現した〝スカイフォール事件〟から数十年が経過していた。
その事件が起きてもなお未だ世界紛争は至る所で起きている。
しかし、ある兵器の誕生が近代戦闘の戦術を一変させる事になる。
拡張型武装及びモジュール結合システム通称〝エグザマクス〟の登場。
それにより、エグザマクスは瞬く間に世界の軍事バランスを塗り替えた。
そして、西暦２１５７年末。
再び地球軌道上にゲートが出現。
ゲートから現れたのは地球とは別太陽系に存在する惑星、惑星バイロンに暮らすバイロンの民であった。
しかしバイロン軍はエグザマクスに酷似した機体〝ポルタノヴァ〟で各国に宣戦布告せずに侵攻を開始する。
バイロン人の考えもわからぬままに蹂躙された地球に生きる人々は一致団結し、〝地球連合軍〟を結成。

突如として始まった惑星間での戦争は５年経過した現在でも終結の兆しが見えない。
その中で、新たに連合に配属された青年とバイロンから逃亡してきた少女が出会うとき、歯車はゆっくりと、動き出す。
この蒼き惑星に救済を。

（作者より）
この作品はバンダイよりオリジナルで展開されているプラモデルシリーズ、≫30ｍｉｎｕｔｅｓ ｍｉｓｓｉｏｎｓ≪をリスペクトした上でss化した作品です。
オリジナル設定をかなり盛り込んでいるため、お気に召さないかと思われますが、どうか温かい目で見守って頂けると幸いです。
また、この作品で≫こんな機体、こんなパイロットを登場させてくれ！≪という方は気軽にこちら作者のツイッター（ｈｔｔｐｓ://ｔｗｉｔｔｅｒ.ｃｏｍ/ＡＲＫ

Ｓｓｈｉｐ４？ｓ＝06）までご連絡を。

では、どうかこの作品もよろしくお願いします。

目次

chapter1 ≫胎動≫ 1
chapter2 ≫邂逅≫ 13
chapter3 ≫トリガー≫ 29

chapter1 »胎動«

ということで記念すべき一話です。
まだ最初なので情報開示量が少なくて困惑するかもしれませんが、今後詳細を明らかにしていきますので気長にお待ちください……（土下座）
ではほんへ、どぞー。

――逃げなくては。
唐突に逃亡から始まって申し訳なさが溢れ返るが、今の私にそんなことを考えている暇すらない。
無機質な通路を駆け抜け、必死に逃げる。
後ろから追っ手が迫る。
なんとしても、私は逃げなくては。

私の持つ〝力〟を悪用されてはいけない。
絶対に逃げて、地球へと行かなければ。
こんな不毛な戦争を、止めなければ――!!

「こっちだ、早く追え！」
「絶対に逃がすな、生かして連れ戻せとの命令だ！」
「待て、この非国民が!!」

待ってやるものか。逃げ切ってやる。
この通路の先にはハンガーがある……すなわち、ポルタノヴァがある可能性がある。
絶対に、たどり着かなければ全てが水泡に帰してしまう。

「おい、この先はまさか……！」
「不味いぞ、あの〝姫様〟ポルタノヴァに乗るつもりだ！」

「行かせるな!!最悪生きてさえいれば良い、撃て！」
「了解！」

その矢先に、背後から銃弾が飛び交う。
これは、不味いことになった……！
だけどあと少し、あと少しで――！
その思いが通じたのか、ようやくハンガーまでたどり着いた。
さぁ、あとはポルタノヴァに乗って〝ゲート〟に飛び込むだけだ。
幸い整備中だった数機のポルタノヴァのうちの一機を拝借することに成功。
動力を起動させ、ポルタノヴァを動かす。

「くそ、不味い！おい第23番隊！あのポルタノヴァを止めろ！」
『了解、さぁ姫様。おとなしく引き下がってください。貴女の身に何かあれば……』
「お黙りなさい！私の力を使おうとしたところでしょうがそうは問屋が卸しませんわ！私は行かなくてはならないのです！そこを退きなさい！」

『やれやれ、残念ですよ姫様……なら、力ずくで止めるまで!!』

来る――!

掴み掛からんとするポルタノヴァに対し、私は体当たりをして怯ませる。

その隙に私は急ぎハンガーから脱出し、ゲートまで急ぐ。

『ぐぅっ……待てっ!』

『隊長、射撃許可を!もう我慢なりません、あのような非国民は即刻排除すべきです!』

『ダメだ!上層部から生かして捕らえろとの指示を蔑ろには出来ん!』

『しかし!』

『最優先事項は姫様の確保だ!それを忘れるな!』

『くっ……了解!』

仲間内で口論しているうちに私はようやくゲート前までたどり着くことが出来

た。

……さぁ、あとは運頼みだ。

私は、意を決してゲートに飛び込んだ。

『しまった！』

『クソッ……HQ、目標ロスト！繰り返す、目標ロスト！』

『なんてこった……！』

視点は変わって、地球。

ここ地球連合軍日本支部に新たに配属される隊員が一人、その門の前で佇んでいた。

「今日から俺も、エグザマクス乗りかつ初の中尉での仕事かぁ……ここまで長

かったなぁ……」

「おいそこの！お前だよお前、そんなしれっとした顔でいるが誰だ？階級は？所属は？」

「ああすいません、自分こういう者で」

そう言って青年はIDカードを見せる。

「〝早乙女悠〟……中尉!?こ、これは失礼！」

「あぁいやいや、いいっすよさっきのタメ口で。IDを見せなかった俺に非があるんですから」

「そういうなら、まぁ……それで、目的は？」

「ここの実験小隊に配属になったんですよ。上から実験小隊に来ないかって言われて」

「なるほど……しかし中尉か。コネか？」

「いやいや、皆の嫌がる仕事を率先してやってたらいつの間にかこんな地位につい

ちゃってて」
「なんだ、万年門番の俺に対する皮肉かこいつめ」
門番は軽く悠の肩を叩き、続けて「ま、頑張れよ。こんなご時世だけどな」と激励した。
その後門番に一蔽し、基地へと向かう。
その途中で、悠はふと空を見上げる。
「……こんなに空が綺麗だってのに、戦争してんだもんなぁ……なんか複雑」
ぼそりと呟いた直後、警報が鳴り響く。
――敵襲だ。
「マジ、かよ――！」

急いで近くにあった施設に逃げ込み、事なきを得る。
逃げ込んだ施設はどうやら整備ドックだったようで、何十人もの整備員たちがせわしなく動いている。

「急げよー！敵は待っちゃくれねぇぞ！」
「おやっさん、〝フォース〟と〝ハーピー〟の準備が出来やした！」
「よぅしでかした！パイロットはまだか？」
「いえ、既に搭乗済みっす！」
「上々！よしハッチ開け！二機とも出すぞ！」
「おやっさん、〝ローレンス〟はどうします？」
「もしかしたら何かに使えるかもしれねぇ、一応火を入れとけ！」
「アイサー！」

そうしてハッチから緑のエグザマクスと青のエグザマクスが出撃する。
悠自身も何か出来ないか探しはじめる。

「こうしちゃいられないな……何か、できないか……？」
「――あ、おいアンタ！パイロットか!?」
「え、あぁそうだけど？」
「丁度良い、今は人手が足りてないんだ！こっちへ！」

一人の整備員に連れられ、たどり着いたのは白いエグザマクスの元。
特徴的なツインアイが二人を見下ろす。

「あの、こいつは？」
「特型アルト〝ローレンス〟だ。今は説明してる時間が惜しい。こいつに乗り込んでくれ」
「はい!?俺が!?でも大事な実験機なんじゃ――」
「今は四の五の言ってる場合じゃない！アンタにもわかるだろ？」
「……わかったよ。乗り込んだら？あとはどうすればいい？」

「ハンガーラックにライフルとシールドがある。それを持っていけ。あとは訓練でやった通りにやればいい。いいな？」
「了解、やるだけやってみるさ。壊しても文句言うなよ？」
「大丈夫だ、壊してもまた直すだけだ。安心して行ってこい」
「――ああ！」

そう言って悠は白きエグザマクス〝ローレンス〟に乗り込んだ。
コックピットの中で手慣れた動作でシステムを立ち上げていき、全システムを起動させる。

「さぁて……どこまでやれるか――やってやろうじゃねぇか！」

その瞬間、ローレンスのツインアイが輝いた。

To be continued…

《次回予告》
突如として戦禍に巻き込まれた青年。
この戦いで、青年は何を見る。
次回〝邂逅〟
この蒼き惑星に、救済を。

というわけで第一話でした。
怒濤の急展開すぎたかもしれない……（後悔）
まだ序盤の序盤なので情報が不足がちですが、今後明らかにしていきます。
どうか楽しみに気長にお待ちくだｓ――あぁ待って、石を投げないで！ちゃんと続きますから！（汗）

では、次回の更新でお会いしましょう。
感想、待ってます（半裸待機）
ではでは（・-ω-）ノシ

chapter2 »邂逅«

というわけで第二話です（土下座）
早速ほんへ、どぞー。

時を少し戻して数十分前。
地球連合軍日本支部、その食堂で一人の男が一人ぼやいていた。

「だぁーもう、ピクルスは抜いてくれって言っただろうがよ……ったくぅ」
「どうしたの、そんなにぼやいて」
「あー……ハリエットか」

ぼやいていた矢先に相席でハリエットと呼ばれた女性が座る。

「聞いてくれよ、俺はここの調理場の奴等にハンバーガーを頼んだんだ。もちろんピクルスは抜いてくれってな。んで意気揚々と出来上がったハンバーガーを受け取ってさぁ食うかってところでピクルスが入ってやがったんだぞ？ひどくねぇか？」

「はいはい、なら私が食べるわよ。ほら、お皿に置いて」

「サンキュー、ハリエット。やっぱ美人だとお優しいのが相場か？」

「貴方がぐちぐち言いながらハンバーガーを食べてるのを見るのがちょっとね。それでブレン？≫フォース≪はどう？」

「あぁ……あのじゃじゃ馬アルトか。まぁ使ってわかったがちとピーキーだな。あれじゃ乗り手を選んじまう。そういうハリエットこそ、≫ハーピー≪はどうなんだ？」

「あらおあいにく様、ハーピーはお利口で素直だから良く動けるわよ？」

「見せつけてくれるじゃねぇのよ……んでハリエット、ここに来たのはそれだけじゃねぇだろ？」

ブレンと呼ばれた男がそう問いかけると、ハリエットは書類をケースから取り出し、こう続けた。

「例の新入り君の話、聞いてる？」

「あー……そういやそうか。確か俺たちの部隊に一人来るんだったか。どんな奴だ？見せてくれ」

「はいこれ。≫早乙女悠≪中尉、年齢は22歳。その若さで中尉までこぎ着けた期待のルーキーって所ね」

「ほー……自分から率先して仕事をねぇ……中々面白そうな奴だな。それに日本人とか珍しいな。何か狙いが？」

「それについては私も知らないわ。ただ、もしかしたら貴方のじゃじゃ馬アルトよりもじゃじゃ馬な≫アレ≪に乗るかもしれないって事だけはわかってるの」

その言葉でブレンは飲んでいたコーラを吹き出した。

「ゲッホゴホゴホッ、それマジで言ってる？」
「本当。でなきゃそんな書類来ないでしょ」
「マジかぁ……あの≫ローレンス≪に、ねぇ」
「……ねぇ、その≫ローレンス≪はどういう機体なの？」
「あー……ざっくばらんとしか聞いてねぇが何でも≫敵機の動力炉を利用したハイスペック機≪らしい」
「つまり出力はダンチってこと？」
「そうなる。見た目はアルトなんだがなぁ……だいぶヒロイックだが」

その方が都合が良いのかもしれないな、と付け加えてブレンはコーラを飲み干す。
軽い食事を終えたハリエットも、プレートを返しに行こうとしていた。
その時だった。

《ｂｅｅｅｅｐ!!》

「ッ！」
「警報……敵か！」
「急ぎましょう」
「ああ！」

二人はテーブルに食器を置いたままに、整備ドックまで走り出した。

「あ、ちょっとお二人さーん！食器置いてかないでー！あー行っちゃった……」

厨房の職員が少々泣きを見たが。

場所は変わって、整備ドック。

ここでは警報を聞いた整備員たちがせわしなく動いており、その中でも褐色の青年が慌ただしくキーボードを叩いて何かを打ち込んでいた。

「どうだジード、≫カリギュラ≪は動かせそうか？」

「いえ……一応動きはしますがステルスモードが機能しません。これじゃただのアルトですよ」

「参ったな……事実動かせるのはフォースとハーピーだけか。他のアルトも出払っちまってるからこりゃ不味いな」

「なんとかステルスモードが使えるように調整します」

「いやいい、お前さんは職員の避難誘導にあたってくれや。ステルスについてはまた後でゆっくりやりゃあいい」

「すいません、お役に立てず……」

「気にすんな、良くあることだ。とりあえず職員は頼むぞ」

「わかりました、おやっさん」

「よーしお前らぁ！急げよ！フォースとハーピーの整備は万全にしとけ！」

「アイサー!!」

その直後、警報を聞いた二人がドックに到着する。
既にパイロットスーツに着替えており、準備は万全だということがうかがえる。

「おやっさん！準備は!?」
「おう出来てるぞ、さっさと乗り込んじまえ！」
「了解！」

即座に機体まで向かい、乗り込む二人。
直ぐ様システムを立ち上げ、エンジンに火を入れる。
そして出撃シーケンスを無視して整備ハンガーから出ようとする。

「あぁおいバカバカ、備品を壊すなっての！あぁクソッ、お前ら！ハッチ開け！」
「うっす！」

『悪いなおやっさん、ブレン フォッカー、アルト≫フォース≫出るぞ！』
『あとでちゃんと謝るわ。ハリエット ミューゼル、アルト≫ハーピー≫、行くわ！』
「まったく……頼むぞ、二人とも」
「おやっさん！≫ローレンス≫はどうします？」
「あー……あれも使えるかもしれねぇ、一応火を入れとけ！」
「了解っす！」

視点は変わって戦場。
今ようやく出撃した二機のアルトが複数の敵機……単眼の機体≫ポルタノヴァ≫と対峙する。
しかしその中で一機だけ救難信号を発していたことにハリエットは気づいた。

『ねぇ、あのポルタノヴァから救難信号が出てるんだけど助ける？』
『当たり前だろ、助けを求めてんなら敵だろうが味方だろうが関係ない。行くぞ、援護頼む』

『了解、安心してインファイトに持ち込んじゃいなさい』

その言葉を皮切りに、緑のアルト»フォース»がバトルアックスを構えて6機のポルタノヴァに向かっていく。

当然黙っている訳ではないポルタノヴァはレーザーライフルを構え、的確に射撃を開始する。

『クソ、やっぱレーザーか！信じるぞお前の装甲を……！』

咄嗟にシールドを構えたフォースに向かってレーザーが殺到するも、軽いフットワークで回避する。

その際数発シールドに直撃したが、大した損傷にはならなかったようだ。

『よし、流石新型！やっぱそうこなくっちゃなぁ！』

『おバカ！右よ！』
『あん？』

その瞬間、フォースの右肩にポルタノヴァが繰り出したスマッシュナックルの一撃が食い込む。
その衝撃でぐらりとバランスを崩しかけるが、すぐに立て直して戦闘態勢を取る。

『んなろぉ……よくもやりやがったな！』
『気をつけなさいな、敵機の方が数が多いのよ？』
『悪い、助かる……だがこのままじゃジリープアーだな』
『そんな言葉どこで覚えたのよ……！』

悪態をつきつつも確実に狙撃を繰り返すハリエットとその機体、ハーピー。
どうにか一機は撃破まで追い込めたが、それでも不利な状況は変わらない。
さらには救難信号を発している機体を守りながら戦わねばならないのだから、な

おのことだ。

『せめてあと一機……いてくれれば……！』

『無いものねだったって仕方ねぇだろ。セイバー2はそのままその機体を護衛してやってくれ。その間に何とかする』

『セイバー1、本気で言ってるの？こんな不利な状況で単機で何とかできるわけ……』

『できるわけない、じゃない。やるんだ。でないとせっかく日本に来たのになにもできませんでした、で済まねぇだろ？』

『……わかったわ。でも、私の狙撃圏内からは絶対に離れないでね』

『了解だ。さぁ、異星人ども！パーティーの時間だ！』

そう言って再度攻撃を仕掛けるフォース。

それに次いで狙撃による援護を開始するハーピー。

そしてその時、味方である二機や敵である彼らにとっても予想外のカードが切ら

れていた。

『――待って、新たな反応！』

『何ッ!?』

『これは……嘘、じゃあ動かしてるのは……！』

『おいどうした、ハッキリ言えよ！』

『わかったわ、とりあえず落ち着いて聞いて……≫ローレンス≪が動いてる』

『――何だって!?』

その刹那白いアルトがハーピーの横を通り過ぎ、フォースの前に出た。

特徴的なヒロイックな見た目のアルトから、一つの通信が入る。

「――マジで来ちまったよ」

『……は？』

そんな間の抜けた第一声だったのだが。

『そこの»ローレンス«のパイロット君？聞こえてる？』

「え、あ、はい聞こえてます」

『とりあえず聞いておくわ。貴方は味方なの？』

「――とりあえずは、味方ですよ。でなきゃここにいないでしょ。それで俺はどうしたらいいんです？」

『……その答えで十分だ。今の状況は此方が完全に不利だ。救難信号発信機体を護衛しながら五機の一つ目野郎どもと戦ってる。で、今お前がしなきゃならん仕事は――』

「……一機でも多く、撃破すること」

『そこまでわかってりゃOKだ。名前は？』

「悠。早乙女悠中尉であります！」

『オーライ、ユウ。今から臨時的にお前をセイバー小隊の指揮下に入れる。コールサインは»セイバー4«だ』

「……了解、セイバー4、行動を開始します！」

その言葉に呼応するように、白いアルト――ローレンスのツインアイが輝いた。

今この瞬間を、生き抜くために。

To be continued.

《次回予告》

混沌とした戦場に降り立った機体、ローレンス。

青年はローレンスを駆り、敵と対峙する。

覚悟を決めた青年の弾丸が、敵を貫く。

次回、»トリガー«

この蒼き惑星に、救済を。

というわけで第二話でした。
戦闘描写を書くのが随分と久しぶりなもので読みづらかったかと思われます……
（；∀；）
次回からはどうにか改善に向けてちょっとずつ直していきますのでどうかご容赦を――ああ待って、ゴミを投げないで！ちゃんと直しますから！（汗）
で、では次回の更新でお会いしましょう。
ではでは（´・ω・）ノシ

chapter3 »トリガー«

さ、第三話ですぞ（´-ω-）
ではほんへ、どぞー。

ガァンッ、と一際大きな衝突音が響く。
その直後にカメラアイを破壊されたポルタノヴァが倒れ伏し、直ぐ様頭部が破壊される。

『ッシ、これで二機目！あと四！』
「くっ……なんだこのアルト、動きが、変になるぅぅぅ!?」
『あっちはあっちで振り回されてるな……セイバー2、フォローしてやってくれ』

『了解。セイバー4、下がって！』
「り、了解！」

ローレンスが後方に下がったのを見た敵機が追撃に走るが、そうはさせまいとハーピーの狙撃が敵機に刺さる。
直撃したポルタノヴァは一瞬足を止め、一歩下がる。

『大丈夫？』
「え、えぇまぁ……そのポルタノヴァは動かないので？」
『うーん……動かない、というより〝動けない〟というのが正しいかもしれないわ。さっきから呼び掛けてるんだけど一向に返答が無いから気を失っているのかもしれないわ』
「あまり時間をかけてられないってことか……！」

そんな会話を交わしている間にも、敵の攻勢はいまだ続く。

隙は逃さんとばかりにナックルで殴りかかるポルタノヴァに対し、咄嗟にライフルで受け止めるローレンス。
しかし、ライフルで受け止めたのは悪手であった。

「マズッ、ライフルが……！」

使い物にならなくなったライフルを捨て、腰部にマウントされた電磁ナックルを取り外し、構える。
さらに猛攻を仕掛けるポルタノヴァに対し、どうにかこうにか回避を続けている。

『チッ、不味いか！この、邪魔だ一つ目野郎！』

ガンッ、と敵機を蹴り飛ばし、ローレンスのヘルプに入るフォース。
しかしその隙に二機がかりで抑え込まれてしまう。

『だぁークソが！この！離せっての！』
『セイバー１！くっ……力量がまるで違うじゃない……！』

ジリジリと距離を詰める敵機に対し狙撃を続けているハーピーだが、動けない。
その理由は、すぐそこにある。

『(このままじゃ……救難要請機までやられる。何か、手は……!!)』
『こなくそっ！よし抜けた――っておわっ!?』
『――ッ、もう限界じゃない……!!だけど、諦めるものですか！』

続けざまに狙撃を繰り返し、近づけさせまいと奮闘する。
その時にも、ローレンスを駆る悠に成長の兆しが見えだしていた。

「(そうだ……ここに来たのに、終われる訳がない！お前だって、まだ諦めたくないだろ！ローレンス！)負けてたまるかぁぁぁ!!」

『うぉっ、セイバー4!?』

電磁ナックルを投石の要領で投げ飛ばし、ハーピーに接近するポルタノヴァの背中にぶつける。

その瞬間、投げ飛ばした直後にブーストを行い急接近し、ぶつけた電磁ナックルを再度キャッチする。

そして、バランスを崩したポルタノヴァの腹部に目掛けて、ブーストによる慣性も相乗した強力な一撃が叩き込まれる。

その一撃を叩き込まれたポルタノヴァはガクンと腕を力なく垂らし、二度と動くことはなかった。

「や、やった……一機倒した！」

『バカ野郎油断するな!!』

「えっ」

直後機体に大きな衝撃が襲ったかと思えば、ポルタノヴァが右から組み付いていたのだ。

咄嗟に電磁ナックルでバックパックに殴りつけるが、それでもポルタノヴァは離さない。

その時、拘束から脱出したアルト≫フォース≪がバトルアックスでポルタノヴァの左腕部を切り落とす。

「あっぶねぇ……」

『だから言っただろうが。油断するなって』

「スイマセン、助かりました」

『気にすんな、それよかまだ来るぞ。備えろ』

「了解」

左腕部を切り落とされたポルタノヴァは再度レーザーライフルを装備、狙いをローレンスにつける。

だがそうはさせまいとフォースが前に躍り出てバトルアックスで胸部装甲もろとも叩き斬る。
まともに食らったポルタノヴァは立ち上がれる訳もなく、力なく倒れる。

『これで4……あと2か。畳み掛けるぞ』
「了解！」

しかし、相手のポルタノヴァは友軍が撃破されているのを見て即座にバックパック簡易型スラスターを噴かして撤退していった。
これ以上の損害は出せないと踏んでの行動だろう。

『……退いたみたいね』
『ったく掻き乱すだけ掻き乱して逃げやがって……引き際が上手いな』
「ともかく、これで状況終了なんですよね？」
『まぁな。とりあえず助かったぜセイバー4。礼を言わせてもらう』

『そうね。貴方が来てくれなかったらここも危なかったもの。ありがとう、セイバー4』
「い、いえ……俺はただ……」
『なし崩し的に乗って戦ったにせよ、お前は助けたんだ。ちっとは胸張ってもいいんだぜ？』
「そう、ですかね」
『とりあえず、まずは帰還しましょう。この救難要請機も連れていかないと』
『そうだな。セイバー小隊、帰還するぞ』

その頃、某所のバイロン前線基地では一人の兵士がある男に報告をしていた。
兵士は申し訳なさそうに男に報告を始める。

「申し訳ありません、大尉……彼女の確保に失敗しました……」
「何、問題ない。それよりも損害はどうなっている？」
「それが、こちらのポルタノヴァ6機二個小隊であたったのですが、そのうち4機が大破。2機がなんとか小破で帰還しています」
「そうか……戦死者には厚く弔ってやってくれ」
「了解しました……それと、一つ大尉の耳に入れておきたい情報が」
「聞こう」
「ハッ、それが……」
「……白い、二つ目か。面白い……」

ニヤリと口角を少し上げ、笑みをこぼす。
男は、まだ見ぬ強敵と戦えると喜んでいるようだった。

「―わかった。では後日追って指示を出す。下がっていいぞ」
「ハッ」

「……地球も、捨てたものではないな。さて――姫様は何を考えているのやら……自身の持つ力をわかっていての行動なのか……まずは、様子見だな」

視点は戻って地球連合軍日本支部。
その医務室の外で、三人の男女はある人物の目覚めを待っていた。

「……しっかし、乗ってたパイロットが子供とはな」
「そうね……武器も持たずにここまでよく逃げてこれたものね」
「――で、なんでお前さんも来てるんだ？ユウ」
「あぁいや……一応戦場にいた一人ですし。俺も知っておかなきゃいけないかなって」
「ホント日本人は勤勉ね。ブレンに見習わせたいくらいだわ」

「おい待てハリエット、それは俺をバカにしてんのか？」
「それは受け取り方が違うからそう聞こえるだけよ。貴方はセイバー小隊の隊長なんだから、もうちょっと勤勉にならないと」
「むむむ……頭を使うのは慣れてねぇんだが……」

そんな雑談を続けていると、医務室から軍医が出てくる。
どうやら待ち人が目覚めたらしい。

「お待ちかね、ってとこか」
「ええ、ですがまだ覚醒したばかりですので困惑されているかもしれません。まずはもう少し回復を待った方が……」
「いや、先に聞ける情報は聞いとくさ。案内してくれ」
「わかりました。こちらです」

三人が医務室に案内されると、端の方でベッド上で上体を起こした少女がこちら

に気づいたのか、にこりと微笑んだ。

「なんだ、結構可愛いじゃねぇのよ」

「……コラッ」

「あっでぇ!?足！足踏むなハリエット！」

「鼻の下伸ばしておいて何言ってるのよ」

「まぁまぁ……あ、はじめましてだな。俺は早乙女悠、君は？」

「わたくしは……サーニャ、と申します。どうぞよしなに」

「言葉遣い丁寧だな……どっか育ちの良いとこで育ったのか？」

「気になる事はそこじゃないでしょ。ごめんなさいね、こんな人たちで。私たちは貴女にちょっと聞きたい事があって来てるの。良ければ話してくれる？」

「わかりました。では、何処からお話しましょうか……」

うーん、と思案顔になるサーニャ。

そこでブレンは一つ、質問を加える。

「とりあえず……まずは、何故ここに逃げてきたか、じゃねぇのか？何かしら理由があってここに来たんだろ？」

「ええ、まぁ……では、わたくしが地球に逃げてきた理由からお話しましょうか。まず、わたくしはこの地球とバイロンの戦争を止めに来たのです」

「戦争を、止めに？」

「はい。地球の方々は話し合って物事を解決しているとデータがありましたし、人として、バイロンの民として、地球の方々と話し合いが出来ればと……」

「……でも、仕掛けてきたのはそちらでしょ？」

「……はい。それは、覆しようのない事実です。ですから、今更と言われようともわたくしは……！」

サーニャが言葉を続けようとすると、ブレンが間に入って一つの疑問を投げ掛ける。

「戦争を止めに、ってのはよくわかった。だが何故アンタが狙われてる？何か、秘密みたいなのを持ってるからなのか？」
「それは……」
「言えない、か。まぁ言いにくいなら言わなくても別に――」
「いえ……大丈夫です。あなた方なら、話せます。悪い人ではないでしょうから」

そうして、彼女はゆっくりと己の身の上の話を始める。
そこから語られる事が、全ての引き金だということを彼らはまだ、知らない。

To be continued.

《次回予告》
襲撃を押し返し、事なきを得た地球連合。
保護された彼女の口からは、地球ではあり得ない事が語られる。

終結は、未だ遠い。
次回、»未来視（ヴィジョン）«
この蒼き惑星に、救済を。

という訳で第三話でした。
うーん、駆け足！（´・ω・`）
次回はもうちょっとゆったりとしたいけど……。
とりあえず現時点での設定を次回更新時にＰＯＮ☆と置いときます。
良ければどうぞ（*´∀`）
では、次回の更新でお会いしましょう。
ではでは（´・ω・`）ノシ

エグザマクス・クライシス

著者　アインスト

発行日　2021年7月22日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-
https://syosetu.org/novel/211953/

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。